

## 【共済連だより】

# 家畜診療日誌

北部基幹家畜診療所 豊田幸晴

携帯用超音波診断装置（以下：エコー）が導入されて、今年の5月で2年が経過しようとしています。初めて、農家に持っていくと珍しがられて、「これが、エコーいうもんか？」とまじまじと見られていました。その傍らで私が直腸検査の用意をしていると、「先生、なにしょん？」と不思議そうな顔。私、「エコーで繁殖検診しようと、用意しとるんじゃが。」畜主、「外側から、見えるんじゃないん？」畜主の方は、人医療域でのエコー診断を想像されていて、プローブを直腸に挿入して診断していくとの私の説明にややがっかりした表情でした。それでも、どのように写し出されていくのか興味津々でモニターを覗き込む。そこに写し出されたのは、砂漠の砂嵐のような画像で何が写し出されているのやら、まったく分からないものでした。「先生、今何が写とるん？」その質問に何も答えられず、自分自身も何が写し出されているのやら解らず時間ばかりが掛かってしまいました。「今まで通りの方が早いんじゃないん？」との冷やかな言葉に、「こんなもん、練習して頭数をこなさんと上手にはならんけん。」と畜主を説得しつつも自分を説得し励ましていました。

あれから2年近く経過し、いまでは少しまともな画像が写しだせれるようになり、繁殖検診では畜主も画像を見ながら、私が言う前に「これ、種がついとるなー。これ、頭か？おお、動いとる。」と確認を求めてこられます。いままでは、直腸検査をした私にしか解らなかつたことが、エコーによって畜主にも理解していただけるようになり信頼関係が増してきたように思います。臨床獣医師なら誰もが経験していると思いますが、自分が妊娠鑑定をした牛がその後発情したり、分娩予定日が来ても産まなかつたりしたことがあると思います。その時、自分では「流産したんだろう。」と思い、畜主は「先生が診間違いたんじゃないか？」と思い、双方気まずい思いをしながら疑心

暗鬼になり、信頼関係を損ねてしまう状況にまで追い込まれることもあります。しかし、エコーの妊娠診断では双方で妊娠を確認できるし、画像で記録していけます。だから、妊娠が確定した牛が発情しても以前記録した画像で確認したり、畜主の記憶に残っていて、トラブルになることはありません。それよりも、以外に胎子が早期に死滅することが多いということが畜主の方にも理解していただだけ、いままでの疑心暗鬼が解決されていくこともあると思います。早期胎子死滅（以下：EED）は、単胎妊娠では7.7%、双胎妊娠で28.8%（1胎子のみEEDも含む）との報告もあります。私たちがこれまでエコー診断でEEDと診断したものは、1.1%でした。

率としては少し低いようですが、これは2006年11月27日から2007年6月8日までのデータで、まだ技術的に充分でなく見逃しがあるのかも知れません。

繁殖領域でのエコー診断は、従来の直腸検査法よりも多くの情報を私たちにもたらしてくれます。それは、①卵巣、子宮疾患、②授精後30日以内での確実な妊娠診断、③双胎診断、④性別診断等です。これらの情報は、診療をしている私たちに有益だけでなく、畜主にとっても有益な情報であり、例えば双子と診断されれば乾乳時期を見直したり、クローズアップを早めにしたりと、飼養管理を考えていけます。情報が多ければ多いほど、いろいろな対応ができ、繁殖管理、飼養管理、農場経営に生かしていけると考えています。

私の所属している診療所には、2台エコーが導入されています。県下にあと2台あり、来年度3台の導入計画があります。全県下でエコーを用いた繁殖診断が行われるようになっていくと思います。私たち獣医師は、技術と知識を高めていくことで、より正確で有益な情報を農家の皆さんに提供していきたいと考えています。